Arts and Cultural Exchange

沖縄伝統芸能南米公演で観客と一緒に踊る様子

「ロジカル・エモーション」展スイス会場での草間彌生作品展示風景

「RUN & LEARN」マレーシアでの成果展のうち、オン・ジョリーン企画
「M_k_ng Sp_c_: WE ARE WHERE WE AREN' T」会場風景
撮影：Chris Pereira

第 14 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展における日本館展示
「In the Real World: 現実のはなし〜日本建築の倉から〜」
（コミッショナー／太田佳代子氏）撮影：山岸剛

アジア学生パッケージデザイン交流事業（日本でのワークショップ）

文化芸術交流

多様で豊かな日本の文化や芸術を様々な形で世界各地に向けて発信します。
文化芸術を通じて日本のこころを世界の人々に伝え、
言葉を超えた共感の場をつくり出し、また、共に創造する喜びを分かちあって、
人と人との交流を深めていきます。

文化芸術交流事業の概要

日本の多様な文化・芸術の海外への紹介

伝統芸能から現代アートまで幅広く、多様で豊かな日本の文化・芸術を、公演・実演・ワークショップ、展覧会、映画・テレビ、翻訳・出版、講演・対話等の形で世界の人々に紹介します。各国・地域の状況に照らして事業計画を立て、特定の国・地域に向けては重点的かつ集中的に、広く世界各地に向けては継続的かつ効率的に、日本文化の紹介を行っています。更に、日本の文化・芸術に関する基礎情報をウェブサイト等を通じて世界に発信しています。

>>>P.13

＋

文化・芸術を通じた世界への貢献

国を越えた専門家同士の交流や共同制作、協働作業を積み重ねることで、文化・芸術の各分野で強固なネットワークを構築します。また、日本の持つ経験と知見を活かして相手国の専門家の育成を支援し、国際文化交流が持続するための基盤を整えます。更に、災害復興、環境問題、文化遺産の保護・活用など世界共通の課題について、文化・芸術を通じて日本と外国の人々が共に考え、共感を深める場を創り出します。

>>>P.16

外交上重要な機会、国・地域への重点的な対応

双方向型、共同作業型の交流事業

広く全世界に向けた継続的な事業展開

世界共通の課題への取組み

中国との青少年交流

日本と中国の未来を担う青少年を中心とした交流活動を促進し、お互いの生活や文化を体験する機会を提供することで、両者の相互理解を促し、より深く息の長い「心と心のつながり（＝心連心）」を築いていくことを目指して、双方向性と協働性を重視した事業を実施しています。

>>>P.18

アニメーターでありキャラクターデザイナーの須田正己氏によるワークショップ、トークショーをジャマイカで開催

中国高校生が神戸・南京町を訪問

日本の多様な文化・芸術の海外への紹介

外交上重要な機会、国・地域への重点的な対応

日本・スイス国交樹立 150 周年、「V4 ＋日本」交流年、日・ポリビア外交関係樹立100周年、支倉使節団訪墨400周年「日墨交流年」等を迎えた 2014 年、この好機を生かして、アピール力の強い大型事業を展開しました。その一方で、世界中の国々でそれぞれの要望に合わせ、巡回公演、他機関との連携・協力による展覧会などで持続的・継続的な日本文化の発信に努めました。

※ V4 とは、チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキアによる地域協力の枠組みで、1991 年にハンガリーのヴィシェグラードで創設。「V4 ＋日本」対話・協力が開始されてから 10 周年となる 2013 年に首脳会合が開催され、2014 年を「V4 ＋日本」交流年とすることで合意されました。

チューリッヒ市立映画館「Filmpodium」にて登壇中の役所広司氏

■「ロジカル・エモーション―日本現代美術」展

「日本・スイス国交樹立 150 周年」を記念し、チューリッヒのハウス・コンストルクティヴ美術館との共催により、「ロジカル・エモーション―日本現代美術」展を開催しました。

両国のキュレーターにより共同企画された本展では、国際的にも著名な草間彌生氏や宮島達男氏、平田晃久氏等、日本の 14 人の美術家、建築家、デザイナーが参加しました。会場に合わせて制作される新作や、展示空間全体を作品として体験できる大型インスタレーションに加え、絵画、彫刻、写真、映像、デザイン、工芸、マンガ、建築等幅広い分野の 80 点を超える作品により構成されました。一見矛盾したタイトルのもと、「論理的な」要素と「情動的な」要素とが内在する作品をジャンル横断的に紹介した展示は、日本の現代美術への新しい視点を提案し、好評を博しました。

また、スイスでの開催後は、「V4 ＋日本」交流年を記念し、ポーランドのクラクフ現代美術館に巡回し、若い世代を中心に現地の観客を魅了しました。スイス、ポーランド両国とも、多くのメディアから取り上げられて注目を浴び、一元的な理解にとらわれない日本の現代美術のあり方と展覧会の魅力が伝えられるとともに、会期中には、各会場で美術、ファッション、建築、デザイン等をテーマに、日本文化を様々な側面から伝える講演会、ワークショップ等の関連イベントも開催され、現地観客の対日理解を促すまたとない機会となりました。

「ロジカル・エモーション」展の会場風景
Courtesy of Museum Haus Konstruktiv　Photo：Ilja Tschanen

■ 沖縄伝統芸能南米公演
～琉球の新風（みーかじ）・男性舞踊家の競演～

「日・ポリビア外交関係樹立 100 周年」、「コロニア・オキナワ（ボリビア）入植 60 周年」を記念し、国立劇場おきなわとの共催により、ポリビア 3 都市で沖縄伝統芸能公演を行うとともに、サッカー W 杯直後のブラジル 2 都市でも公演を実施し、2015 年の「日ブラジル外交関係樹立 120 周年」に向けた機運づくりを行いました。

国立劇場おきなわの芸術監督・嘉数道彦氏が精選した踊り手 5 人と音楽家 4 人は、沖縄の伝統芸能の継承と革新に取り組む若き男性実力派。古典的な作品から賑やかで明るく軽快な作品に至るまで、沖縄の舞踊・音楽・演劇の多彩な魅力を盛り込んだ公演はすべての会場で満員御礼、スタンディング・オベーションを勝ち取りました。

世界最大の日系人コミュニティを有するサンパウロでは、チケットの予約開始後 1 時間と経たないうちに配布を終了。大きな期待と注目を集めました。公演終盤は観客全員が総立ちとなり、会場は暖かい拍手と声援で包まれました。リオデジャネイロ会場はブラジルが誇る最新の総合芸術センター、シダージ・ダス・アルチス。ホールの大半は非日系の観客で埋まり、言葉が通じずとも団員のコミカルな動きと優美な舞いに笑いや拍手が溢れ、スタンディング・オベーションの波が広がりました。

沖縄伝統芸能サンパウロ公演でのスタンディング・オベーション

ボリビアのコロニア・オキナワは第二次世界大戦後、沖縄から集団移住した人々が築いた町。入植 60 周年記念式典の 1 週間後に訪れた団員たちを熱烈歓迎してくださいました。公演の翌日、公演団は地元の小学校を訪れ、普段から三線や琉球舞踊を習っている児童生徒に特別指導を行いましたが、地球の反対側で沖縄文化の継承に取り組む子どもたちの熱心な姿に、団員たちも自然と頬がゆるんでいました。ボリビア第 2 の都市サンタクルスでは集客が懸念されましたが、テレビ番組出演の効果もあって 400 席の会場に 600 人以上の人々が押しかける大盛況の公演となりました。そして千秋楽は標高 4,000 メートル、ボリビアの首都ラパス。長旅の疲れや高山病に悩まされながらも、時には酸素ボンベの力を借りながら熱演。拍手喝采の中、大団円を迎えました。

16 日間のツアーを通じて、沖縄伝統芸能の新しい風を南米に届けるとともに、ボリビアと日本の間に文化の虹をかける事業となりました。

■ 支倉使節団訪墨 400 周年記念「日墨交流年」
セルバンティーノ国際芸術祭

セルバンティーノ国際芸術祭は、ラテンアメリカで最も重要な芸術の祭典として、メキシコの世界遺産都市グアナファトで毎年 10 月に開かれます。音楽、オペラ、演劇、舞踊、美術、映画、文学等、様々な分野の芸術家 3,000 人以上が参加し、約 40 万人の観客が鑑賞。その模様はマスメディアを通じて連日のように報道されました。

2014 年の第 42 回では、支倉使節団訪墨 400 周年「日墨交流年」を記念し、日本が単独の公式招待国に選ばれ、秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、「和」をテーマに日本特集が開幕。約 2 万 3 千人の観客が日本の芸術文化の幅広い魅力を堪能しました。国際交流基金は、企画立案の初期段階から芸術祭プログラム・ディレクターの訪日調査に協力するとともに、日本の公演団の参加や展覧会の開催等を積極支援。日本特集の成功に寄与しました。

10 月 8 日の開幕記念コンサートは和太鼓音楽集団「東京打撃団」が務め、躍動的な和太鼓演奏にスポットライトが当たりました。終演間際から会場周辺では花火が打ち上げられ、立ち見も含め 5,000 人を超える観客が総立ちとなって日本の参加を祝いました。10 月 23 日、ヴァイオリニストの五嶋龍氏とグアナファト州立大学オーケストラとの共演では 800 人定員の会場が満席となり、五嶋氏の卓越したテクニックと表現力、日本とメキシコの若さ溢れる共演に観客から盛んな拍手が送られました。そのほか、最先端のテクノロジーとダンスの融合に挑戦する「ライゾマティクス×イレブンプレイ」、「八王子車人形西川古柳座」、現代音楽アンサンブル「ネクスト・マッシュルーム・プロモーション」等、いずれの公演も熱狂的な歓迎をもって受け入れられました。

これら公演団の一部はメキシコ国内を巡回。合計 24 都市で 25 回公演を実施し、4 万 4 千人以上の観客を動員する成果を収めました。今回の芸術祭参加を通じて、400 年にわたる日本とメキシコの相互理解がさらに深まり、未来志向で幅広い交流が促されることが期待されます。

セルバンティーノ国際芸術祭の開幕を飾る「東京打撃団」の野外公演
写真提供：セルバンティーノ国際芸術祭事務局

■ パリ「北斎」展

19 世紀に欧州で開花したジャポニスムの火付け役となった『北斎漫画』（1814 年）の出版 200 周年を記念し、フランス国立美術館連合・グラン・パレとの共催により、2014 年 10 月 1 日から翌年 1 月 18 日にかけて大規模な「北斎」展を開催しました。

1900 年のパリ万博のために建てられたグラン・パレ国立ギャラリーの前には、19 世紀の欧州美術に多大な影響を与え、パリの芸術家たちも魅了した北斎の作品をひと目見ようと、連日長蛇の列ができるほど。北斎に影響を受けた作品や資料も展示され、700 点に及ぶ幅広い作品によって北斎の画業を総合的に紹介する本展には約 36 万人が入場し、大成功のうちに幕を閉じました。

本展覧会は、2013 年 6 月、オランド仏大統領が国賓訪日の際に発表された日仏共同声明の付属文書「日仏間協力のためのロードマップ」に基づく開催でもあり、世界中から観光客が集まる芸術都市パリの中心部で日本の芸術文化の魅力を大々的に紹介する機会となりました。

「北斎」展では、グラン・パレ国立ギャラリーの前に連日長蛇の列ができた

Arts and Cultural Exchange

文化・芸術を通じた世界への貢献

広く全世界に向けた継続的な事業展開

多様なジャンルとテーマで構成された巡回展、全 12 言語版の日本映画を揃えるフィルム・ライブラリー、劇映画やドキュメンタリーの DVD 等、国際交流基金では文化交流を促進する多彩な展覧会や映画上映会を、全世界で広く実施しています。さらに、日本のドラマやアニメ、ドキュメンタリー番組を現地テレビで放映したり、各国の国際図書展や美術展・建築展等に継続的に出展したり、日本に関連する書籍に対して翻訳出版助成を行う等、様々な形で日本文化を紹介し続けています。

■ 翻訳推薦著作リスト『Worth Sharing』

国際交流基金は「翻訳出版助成プログラム」を通じ、過去 40 年間にわたり、日本に関する図書の海外出版を支援してきました。このプログラムにより翻訳・出版された図書は 1,500 件以上、言語は 50 を超え、そのジャンルは古典文学、現代文学、歴史、社会学、政治、経済から文化論に至るまで様々です。

そのような中、海外の人々の間で、日本の現代社会に対する理解が一層進むことを願って、特に翻訳・出版が期待される優れた著作を小冊子『Worth Sharing ―A Selection of Japanese Books Recommended for Translation』にまとめ、紹介する取組みを進めています。これは、日本の「いま」を描き、日本社会や日本人について、等身大の姿を伝える優れた著作を日本からも積極的に発信していくための仕掛けです。選書には、日本の文学と翻訳に精通している選書委員の協力を仰ぎました。

本冊子をまとめるにあたっては、これまでに現代日本の図書があまり紹介されてこなかった言語圏での指針となるよう、テーマをゆるやかに設定したうえで選書しています。1つの切り口から見た日本の姿が、視点を変え、異なる角度から眺めれば、新たな色彩を放つ、一面的には捉えがたい日本の文化と社会の諸相を伝えることを目指しています。

2014 年に刊行した第 3 号のテーマは「日本の愛」。「愛」とは極めて多義的な概念であり、恋愛、家族愛、郷土愛等、用いられ方によって様々な意味合いが含まれます。人間としての普遍的な感情や価値観が色濃く表れるのも愛ならではです。同時代を生きる日本人の様々な愛の形を表現したノンフィクション作品を中心に、20 冊を紹介しました。

この冊子に掲載した図書の翻訳・出版については、質の高い翻訳と適切な出版計画があれば、「翻訳出版助成プログラム」で積極的に支援を行っており、これまでも多くの国で出版が相次いでいます。本冊子をきっかけとして、日本の作品、作家、翻訳者や出版社が出会い、海外の読者一人ひとりに日本との交流の芽が生まれることを期待しています。

■ 巡回展に合わせたレクチャー・デモンストレーション、ワークショップ

国際交流基金が実施する巡回展は、アート、建築、デザイン、ポップカルチャーをはじめとする多様なジャンルとテーマで構成され、世界各国を巡回しながら日本の美術や文化を紹介する大切な事業の 1 つです。さらに、この巡回展の実施に合わせて専門家、実演家等を派遣し、レクチャー・デモンストレーション（解説と実演）やワークショップ等の複合的な事業を積極的に展開し、より深い日本理解の促進に努めています。

2014 年度は、「日・中米交流年」の開幕を記念し、巡回展「キャラクター大国、ニッポン」とも連動する形で“アニメソング界の帝王”水木一郎氏による特別ライブをコスタリカの首都サンホセで開催。その模様は現地紙・テレビ、ソーシャルメディアを通じて広く共有され、中米諸国における日本のポップカルチャー人気に最大限応える事業となりました。

また、武具と武術の歴史や現代文化としての武道を紹介する巡回展「武道の精神」を、エチオピアの首都アディスアベバで開催するのに合わせて、空手の専門家 2 人を派遣し、現地の空手家に対する指導や学生向けのレクチャー・デモンストレーションを実施。参加者からは「非常に興味深く、質の高い充実したプログラムだった」との感想が異口同音に寄せられました。

「日・中米交流年」の開幕記念イベントにて、歌手の水木一郎氏とコスタリカの共演者・観客たち

巡回展「武道の精神」より、空手家によるレクチャー・デモンストレーション（エチオピア）

双方向型、共同作業型の交流事業

日本と海外のアーティストとスタッフが、長い時間をかけて共に 1 つの舞台公演や展覧会を創り上げる場を創出し、共同制作の成果である作品を国内外で紹介しています。このような共同制作事業は、美術館や博物館の学芸員、舞台公演のプレゼンターやプロデューサー等の文化芸術活動を支える様々な専門家を招へい・派遣し、国際シンポジウムや対話事業を継続的に実施する中で、専門家同士のネットワークが形成され、交流関係が深化した結果として生まれたものです。

■ 東アジア共同制作シリーズ Vol.1
野田秀樹作・演出『半神』（日本・韓国）

日本と韓国の国際共同制作事業として、原作・脚本 萩尾望都氏、脚本・演出 野田秀樹氏による演劇『半神』をソウルと東京で上演しました。

東京芸術劇場、明洞芸術劇場（ソウル）との共催による本事業では、400 人を超す応募者の中からオーディションで選ばれた韓国人俳優を起用する一方、野田氏の演出のもと、照明・音響等の舞台美術チームに日本演劇界を代表する制作陣を迎え、文字通り日韓の共同制作により 1 つの舞台を創り上げ、両国で好評を博しました。

日韓両国の間では、これまでも様々な文化交流事業が行われてきましたが、本事業では日本の制作陣と韓国の俳優が正面から向き合って創作活動に取り組み、ソウルと東京で公演を行ったことで、新たな芸術表現や文化交流の姿を提示するとともに、日韓両国民が同じ公演を等しく共有することができ、非常に意義のある機会となりました。

■ キュレーター・ワークショップ・イン 東南アジア
「RUN & LEARN: New Curatorial Constellations」

文化協力プログラムの一環として、東南アジアにおける若手キュレーター育成事業「走りながら考える:新しいキュレーター像を求めて」を実施しました。

インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイで、今後活躍が期待される 20 ～ 30 歳代のキュレーターを対象に、日本と現地のシニア・キュレーターによるワークショップを開催。その中から選ばれた 14 人の若手キュレーターは 2 週間の訪日研修に参加し、調査と議論を重ねながら各々の企画を練り上げました。2014 年 12 月から 2015 年 2 月にかけて、上記 4 ヵ国 9 都市で開催した彼らの成果展は、いずれもアートを取り巻く各地の状況を反映した、個性豊かなプロジェクトとなりました。

また、成果展の開催後は、それぞれのプロジェクトを記録し、各国の活発な芸術事情を紹介するガイドブックを発行。日本と東南アジアとの新たな美術交流の基盤整備を目指しました。

■ ASEAN オーケストラ支援事業

明治以降、西洋音楽の受容に努め、他のアジア諸国に先駆けてオーケストラを成立させた日本は、先人たちの 70 年以上にわたる苦労の末に世界一流のレベルに到達したと言われています。長い時間をかけて西洋音楽を欧米から学んできた日本だからこそ、アジアのオーケストラと共に考え、伝えられるものがあり、教わることもあると考え、公益社団法人日本オーケストラ連盟との協力により「ASEAN オーケストラ支援事業」を開始しました。

本プログラムは、ASEAN 諸国のオーケストラの運営・企画に携わるスタッフを招へいし、日本各地のプロ楽団の現場で研鑽の機会を提供する事業と、日本のプロ楽団で経験を積んだ日本人音楽家を ASEAN 諸国に派遣し、現地のオーケストラに指導を行う事業の 2 つを柱としています。

2014 年 9 月にはタイのバンコク交響楽団（BSO）からスタッフ 3 人が来日。首都圏と地方の 5 つの楽団の下で 25 日間の研修に参加しました。参加者はフランチャイズやファンドレイジング（資金調達）、公演の制作から広報まで、日本の楽団運営から多くの刺激を受けました。また、日本側関係者にとっても、アジアのオーケストラ運営事情を知る貴重な機会となりました。

このように、日本と ASEAN 諸国のオーケストラ関係者が双方向の交流を重ねることで、今後、「アジアのオーケストラ」独自のスタイルが生まれることが期待されます。

国際共同制作『半神』　撮影：岡本隆史

バンコクの Bang Khun Phrom 宮殿にて、庭園野外晩餐会に向けた練習風景

中国との青少年交流

世界共通の課題への取組み

国境や言葉を超えた共感を生むことができる文化・芸術の力を生かし、世界と共に手を携えて、災害からの復興、文化遺産の保護・継承、スポーツ分野での国際貢献等のテーマに向き合うことを目指し、事業を実施しています。

■ 砂川航祐コーチ　スーダンでレスリング指導

スポーツを通じた国際貢献事業 SPORT FOR TOMORROW の一環として、スーダンの首都ハルツームにレスリング・コーチの砂川航祐氏（2012年全日本学生選手権優勝者。柏日体高等学校教員）を派遣し、現地有力選手に対するレスリング実技講習を２ヵ月に渡り実施しました。スーダンでは、3,000 年以上受け継がれてきた伝統的な「ヌバレスリング」の人気は高いものの、オリンピックで適用されるレスリングルールが十分に浸透していないため、国際的な選手が育ちにくい現状にあります。内戦後も民族間の対立が根深く残るスーダンにあって、レスリングに対する民族を超えた熱気を生かして国民を１つにしたいと願う選手たちは、砂川コーチの指導を受け、2020 年東京オリンピック・パラリンピックへの出場を目指します。

スーダンのレスリング選手に囲まれる砂川航祐コーチ

■ カマン・カレホユック博物館「保存修復学」フィールドコース

トルコのカマン・カレホユック考古学博物館（日本政府の一般文化無償資金協力により建設）において、公益財団法人中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所との共催により、トルコ全国から集まった学芸員に対し、日本の博物館展示専門家が遺物保存修復学の重要性を実践的に指導する講習を実施しました。

トルコ各地の考古学博物館は保存修復の体制が整っておらず、運び込まれた遺物が処理されないまま収蔵庫に放置されている現状があります。そこで本コースでは、実際にカマン・カレホユック遺跡で出土した遺物の観察・測定・修復・撮影の実習を通して、日本の高い保存修復技術を学ぶ機会を現地の学芸員に提供しました。参加者たちは、今回得た知識を生かし、それぞれの地域の博物館でこれまで軽視されてきた遺物保存修復を積極的に担っていきます。

■「3.11―東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」展に合わせたレクチャー・デモンストレーション

東日本大震災からの復興に向けた建築家たちの活動を紹介する巡回展「3.11―東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」をインドネシア３都市で開催するにあたり、2015 年３月、日本を代表するコミュニティ・デザイナーの山崎亮氏を派遣し、インドネシアの建築に関わる専門家や学生、一般市民に対して講演とワークショップを実施しました。

経済成長が著しいインドネシアは自然災害が多発する国でもあり、日本だからこそできる貢献がたくさんあります。今回、講演やワークショップに先だって、山崎氏はジャカルタの建築関係者たちの取組みや、メダンの歴史的建造物の保存・再生プロジェクト、スラバヤの若者による地域活動の様子を丁寧に視察し、それらの活動の担い手と積極的な交流を行いました。インドネシアの実情を踏まえたうえでの山崎氏の講演は、日本の防災や建築への取組みに対する聴衆の理解を効果的に促すとともに、両国におけるコミュニティ・デザインの実例を共有しながら、自然災害時にコミュニティが果たしうる役割を共に考え、今後の継続的な協力関係を模索する機会となりました。

遺物保存修復学の実習課程に参加するトルコの学芸員たち
写真提供：(公財) 中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所

インドネシアで地域活動を担う若者たちと山崎亮氏

日中交流センター事業

日中交流センターは、日本と中国の次代を担う若い世代の交流、相互理解を促進するため、2006 年に設立されました。中国の高校生を約 11 ヵ月間日本に招へいし、日本人と同じ学校・家庭生活体験を提供する「中国高校生長期招へい」、中国国内で日本の雑誌、マンガ、音楽等の最新情報を紹介する「ふれあいの場」の設置・運営、大学生など若者同士の交流のための派遣・招へい、情報共有・連携強化のための「心連心ウェブサイト」運営等、様々な切り口からの事業を通じて日中間の青少年交流を進め、顔と顔の見える関係を築いています。

「中国高校生長期招へい」事業の第一期から第八期までの修了者累計 267 人のうち、2014 年度末までに 109 人（約４割）が大学進学等の目的で再び来日しています。また、大学生や社会人になった後、大学生交流や「ふれあいの場」主催のイベントに積極的に参加している修了者も数多く、事業終了後も息の長い交流が生まれています。

■ 新たに「杭州ふれあいの場」が開設

2014 年、杭州に新たな「ふれあいの場」が浙江工商大学内に設置され、11 月 15 日に開設記念式典が開催されました。

開設を記念し、日本語や和服の講座、日中の大学生による交流イベントを開催。アニメ・マンガの特徴的な日本語表現を学ぶ講座では、参加者は様々なキャラクターに扮し、日本語の台詞にも挑戦しました。「和服ワークショップ」では、参加者全員が浴衣の着付を体験し、美しく見える配色や髪形、所作も学びました。「和風文化祭」と題した大学生交流事業では、こけしやお守りづくり、キャラ弁づくり、コスプレ体験といった企画を実施し、のべ 1,000 人近い来場者を魅了しました。

各「ふれあいの場」では、現代日本に触れる機会を提供するほか、定期的に文化交流イベントを実施しています。これら「ふれあいの場」の活動の様子は、日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」（http://www.chinacenter.jp/）で発信しています。

日中大学生交流イベント「和風文化祭」でのキャラ弁づくり

■ 第九期生、日本で奮闘中

「中国高校生長期招へい事業」の第九期生となる中国人高校生 31 人が 2014 年９月に来日しました。彼らは北海道から沖縄までの全国各地の高校に散らばり、約 11ヵ月間の留学生活を送ります。彼らの留学生活と成長の軌跡は、「心連心ウェブサイト」上の「心連心 TV」、「留学ドキュメンタリー」で追っており、「留学生日記」では留学生たちが自身で記した日々の記録で、奮闘ぶりを垣間見ることができます。まだ十代の若者である彼らは、日本に長期滞在し異文化の中に身を置くことで、人間としても大きく成長していきます。

来日から半年が経った 2015 年１月、大阪・関西国際センターに集まり「中間研修」を行いました。日本での生活の中で、ホストファミリーや学校の友だちとの関係、異文化への戸惑い等、様々な悩みが生まれています。研修では、そんな悩み・不安を共有しながら、仲間意識を強めるとともに、自分自身の居場所で頑張ろう、と留学生活後半へ気持ちを新たにしました。また、訪問先の神戸・南京町では華僑の方から中華街の歴史を学び、大阪では本事業第六期生の先輩から留学当時の体験談を聞く等、日中交流のあり方についても学ぶ機会を持ちました。

■ 初の試み、大学生交流事業リターンズを実施

2014 年３月に、岩手県立大学の学生チーム「じぇじぇっといわて」が重慶ふれあいの場（重慶師範大学）を訪問し、東北のお祭りを日中共同で実施する「じぇじぇっと祭り」を開催。それから４ヵ月後、今度は重慶師範大学の学生 10 人が岩手を訪問して岩手県立大学の学生と再会し、総勢 32 人の日中混成チームで東北を舞台に、心と体で互いの文化や価値観を感じ合う様々な文化交流を行いました。

重慶での「じぇじぇっと祭り」で一緒に練習した「盛岡さんさ踊り」の大会に一緒に出場したほか、遠野ふるさと村で日本文化体験に挑戦し、東日本大震災の学びを伝える大船渡津波伝承館を訪問しました。一般向けには、中国結びづくりや漢服体験等の中国文化紹介イベントを実施しました。

交流の様子は地元紙・テレビでも取り上げられました。また、これらの活動が岩手県立大学内で高く評価され、「じぇじぇっといわて」チームは 2014 年度の岩手県立大学学長奨励賞を受賞しました。

日中混成チームで「盛岡さんさ踊り」に出場